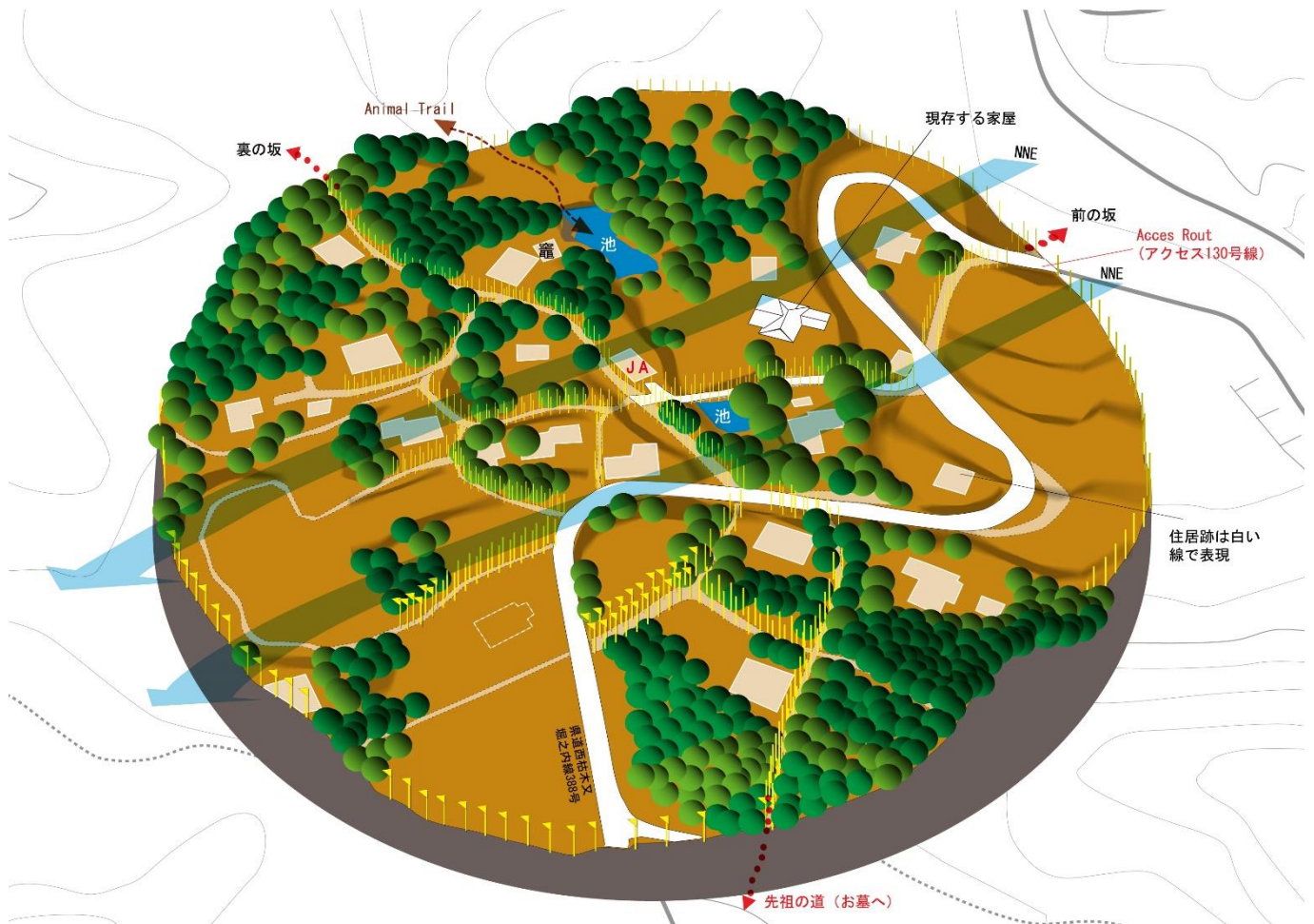


昔はみんなたのしかった

文化人類学手法によるフィールド・ワークから



十日町市にあった2ヶ所の「小貫」という集落を対象にしています。ひとつは旧松代町にあり、もう一つは信濃川の対岸にある旧中条の飛渡にありました。「小貫(こつなぎ)」という地名には、大道と小道、集落と集落を繋ぐ交通路の要や峠から降りた地点という意味があり、交通の一服休みの場所に立地した集落と考えられます。

2ヶ所とも平成4年と平成19年に閉村となっており、それぞれ400年、800年の在住の“証し”が「碑文」などとして遺されています。

それぞれの集落は数百年の長きにわたって、地域の自然環境に適応しつつ、農業や暮らしを創意工夫し、それぞれの集落の歴史・文化を築いてきました。また、こうした各地区独自の農業や暮らしの多様性が、地域全体の生態系を支えるとともに、自然災害や社会環境の変化への適応力を高めてきました。

昭和時代の国策である戦後所得倍増論に共鳴され村を離れる人後断たずとあり、また、平成時代の市町村の大合併による各地区の共同施設等の統廃合が進むなど地域コミュニティが崩壊し農業生産性が衰退し集落として立ち行かなくなった理由なども「閉村の碑」の碑文や土地利用の跡などに垣間見ることができます。

こうした中、近年、種苗の知的財産権の保護を目的に「種苗法」が改正され、各地域の農家が伝統的に維持してきた独自の「自家増殖」が制限されるなど、農業の多様性の維持が困難になることが懸念されています。産業や経済のグローバル化が進み、気候変動問題が顕在化する今日、地域農業のかつての多様性が持続可能な発展に寄与してきた役割をもう一度見つめ直していくことが大切です。



飛渡・中条の小貫集落は、こうした社会情勢が進行する中で、平成16年10月の新潟県中越大地震が契機となり離村が相次ぎ同19年に閉村に至っています。

遺されている村史、郷土史などによると小貫集落の人口は、江戸時代の元禄5年(1692年人口20)との記載があり、明治10年には人口112人との記録があり、以降、昭和45年～60年にかけて人口が80～38人で推移していました。戦後の昭和22年には、集落の最高人口として世帯数20戸、人口185人、子供50人とあり(国勢調査)、閉村時には4世帯12人まで減少しています。

ここには長い郷土史を通して様々な共同施設が設置されており、興味深いものがあります。

農協(小貫農協・昭和 33)、共同作業場、診療医院、養魚池、小学校、共同竈、神社、農道、墓地、簡易郵便局、寺院、発電用の取水堰、石積み橋梁、植物(樹木・樹種)、自然災害(洪水、地震)、明治時代の感染症の“はやり”などです。

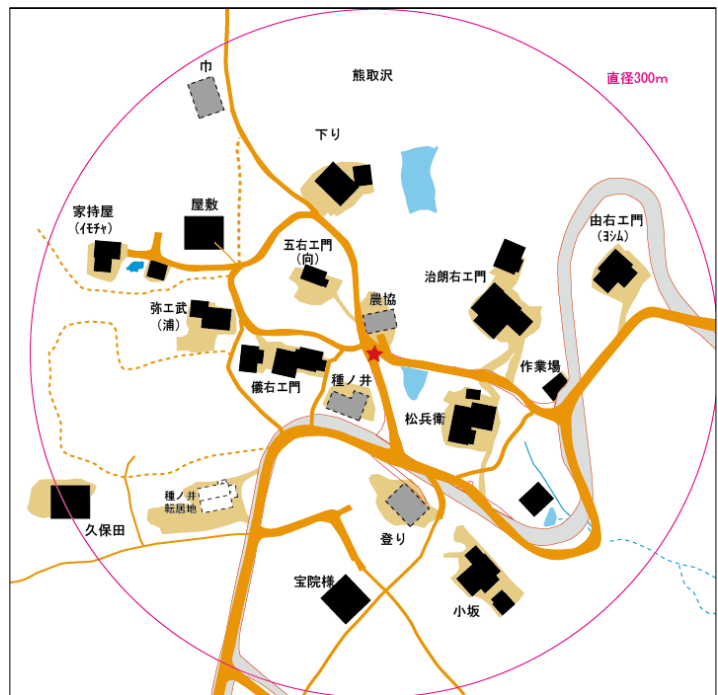
この明治12~13年のコレラ、腸チフスといった感染症の発出と神社との関わりについては、コロナ禍の時節柄大変興味深い記録が残されています。

今回のプロジェクトでは、こうした過去の集落のありようやそのための施設を文化人類学的な調査手法によって、往時の集落の平安な暮らしの歴史を明らかにしようとするものです。

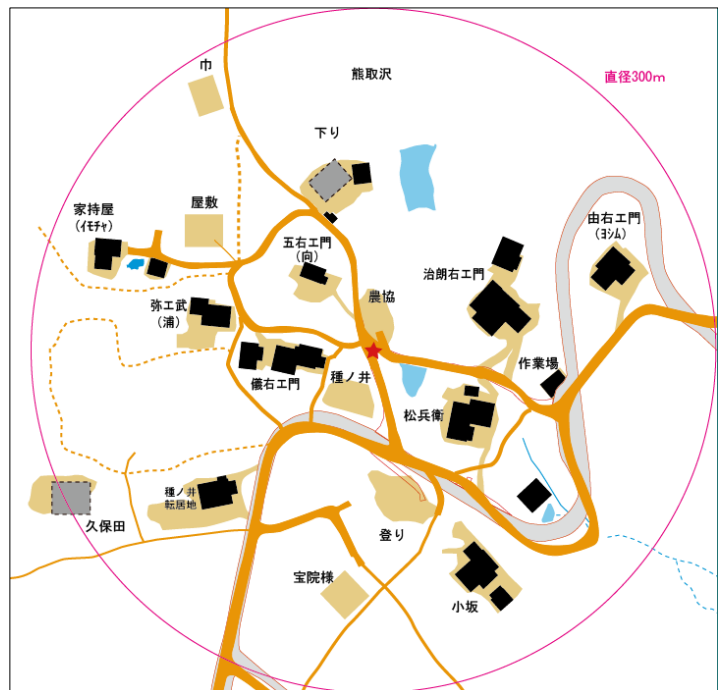
まず、集落の中心で経済社会生活の要であった農協建屋があったと思われる地点を中心として直径300メートルの範囲で、集落の往時の表土面を露出させ旧集落や暮らしの痕跡を見つけることが、本調査の目的です。

この農協跡のすぐそばには、人々の離村を決定づけた中越地震によって生じた地割れの跡も見ることができます。

当時の地形、傾斜、植物、敷石、養魚池、竈、広場、寺社、墓地、御堂、村道跡、平成16年の新潟中越大地震時の地割れ跡などはほぼわかっておりますが、すでに消滅してしまった多くの事柄についても、今後、調査していくことが望まれます。



1968年の集落の状況

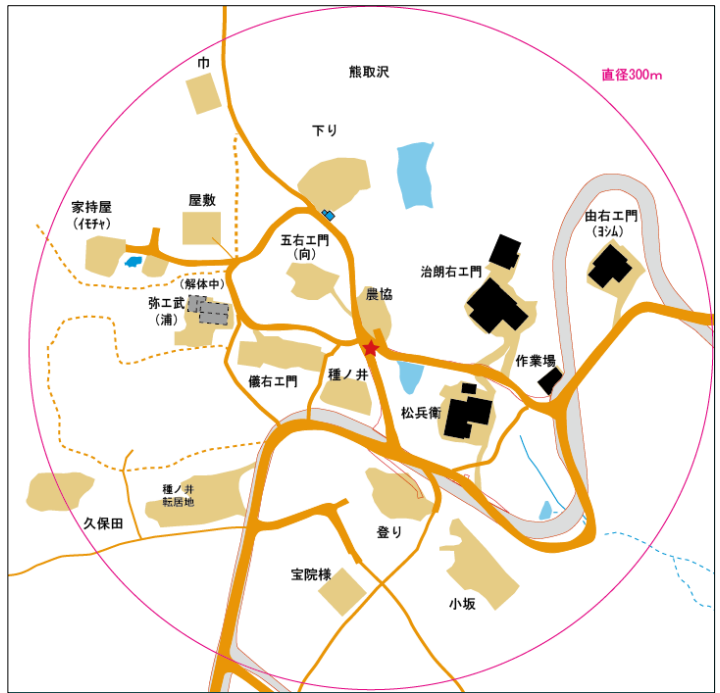


1976年の集落の状況

コミュニティのあり様を探るためにここでは往時の集落住民の村内での日常生活の行き来の跡を遺している小路を辿り黄色いポールで再現してみました。

こうし共同社会生活のしきたりの基本でもあり、人類学上の時代区分の目安となる葬送の慣習について土葬か火葬かは現集落の長老からは確証を得られませんでした。

ただ葬送で骨を喰む慣習があったことは確かめることができました。今後の調査で明らかにされるべき課題は多岐にわたっています。



2005年の集落の状況

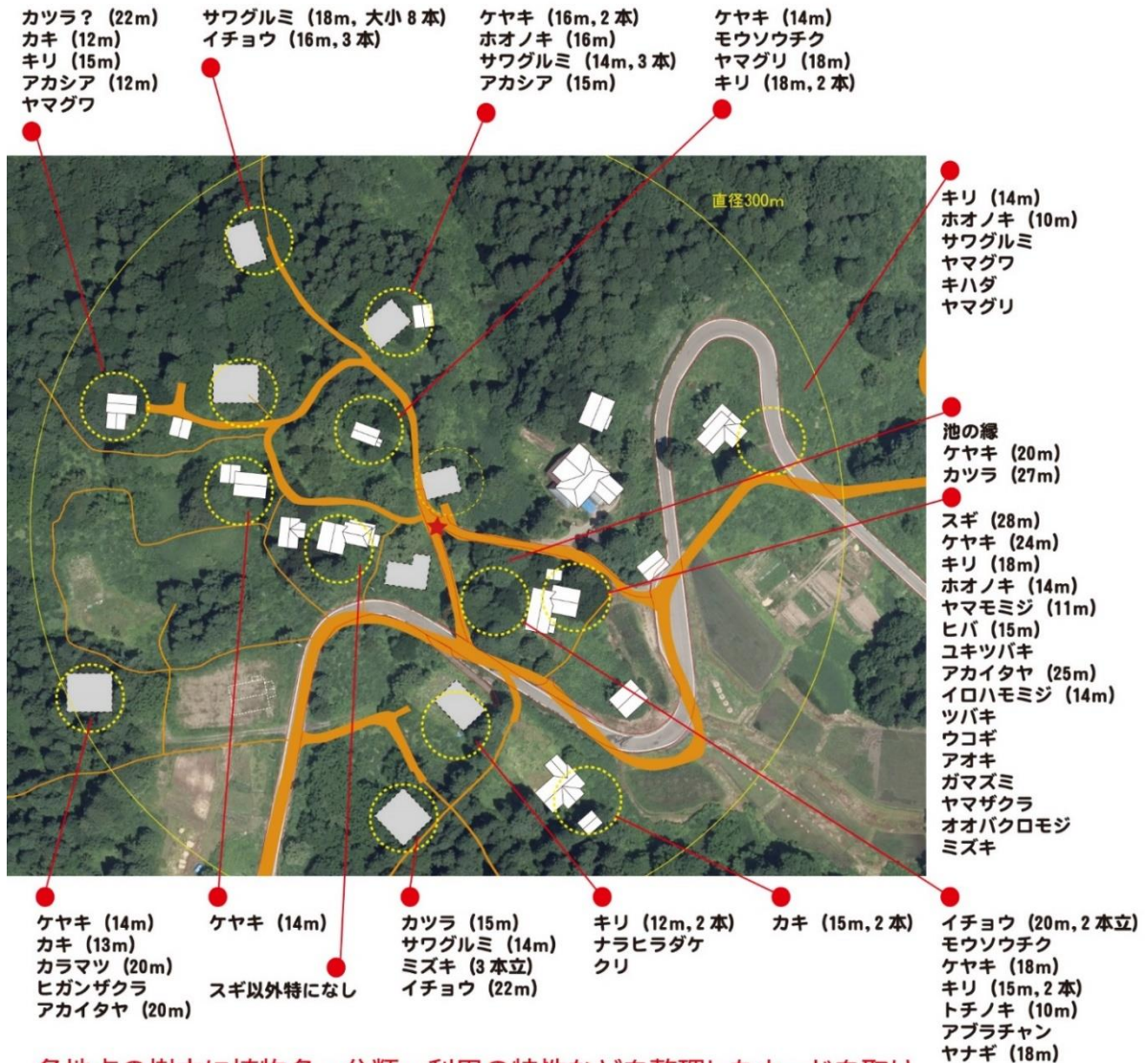


2017年の集落の状況

植物分布

飛渡・中条の小貫集落

住宅跡地及び周辺に見られる主な植物（樹木）を示しています。
植物名の後の（）内は、樹高10m以上の樹高（m）と周辺での本数を示しています。



各地点の樹木に植物名・分類・利用の特性などを整理したカードを取り付けています。近づけない場所や危険な場所については、小径のポール沿いに植物カードを設置してあります。

(調査協力：志賀、他)

地域に生育する植物には、昔に植えられたり、生えてきたりした樹木をはじめ、人々の離村後に植えられた樹木、田畑や住宅跡の荒地に自然に生育してきた植物など、多種多様です。

こうした植物の状況を見ることにより、地域の環境や歴史、文化を知ることができます。ここでは、津南町にある志賀庭花園の志賀孝さんの協力により、小貫集落に生育している主な植物について現地で調査しました。

これらの植物の分布(上図)と実際の樹木等に樹種名を記したカードを貼っています。また、これらの植物の特徴(昔からの利用のされかたなど)をカードにし、次ページ以降に示しています。地域を知る参考にして下さい。

01 アカイトヤ（赤板屋）【和名:ベニイタヤ(紅板谷)】

学名 *Acer mono* var. *maurill* *Acer pictum* subsp. *mayrii*

英名 (Akaitaya kaede tree)

科名 ムクロジ科←カエデ科(カエデ属) 落葉広葉・高木

分布 日本固有種

北海道及び本州日本海側(東北地方から島根県)、南千島に分布

- 特徴
- 若葉が紅紫色をしていることが名前の由来。春は赤色、夏は緑色、秋は黄色に黄葉する。イタヤカエデの変種に分類される。
 - 白神山地や乳頭高原などブナ帯の山地ではアカイトヤ(ベニイタヤ)が広がる。
 - 葉が開く前に、蛍光色のような鮮やかな黄色の花を枝一面に咲かせ、新緑の森を鮮やかに彩り、よく目立つ。花言葉は「愛と豊穡」
 - 樹液を砂糖の原料としたこともある。材は良質の木炭、建築や器具材にも利用

02 アカシア、アカシヤ（金合歡）

学名 *Acacia* Mill.

英名 *Acacia*

科名 マメ科(アカシア属) 落葉広葉、高木

分布 アカシア属は約 1000 種が熱帯から温帯にかけて、特にオーストラリア大陸、アフリカ大陸に多数の種が分布

- 特徴
- 日本では、明治時代に輸入されたニセアカシアを当時アカシアと称していたことから現在でも混同される。(アカシア蜂蜜はニセアカシアの蜜)
 - アカシア属の樹皮から得られるタンニンは、動物の皮のなめし加工に使用
 - アカシア樹皮抽出物は、健康食品や機能性表示食品に利用
 - 耐久性が高いアカシア材は、線路の枕木や木クギ、木炭として利用。またやせた土地や荒地でも良く茂るため、有用植物として緑化にも利用。

03 イロハモミジ（伊呂波紅葉）【別名:イロハカエデ】

学名 *Acer palmatum*

英名 Japanese maple

科名 ムクロジ科←カエデ科(カエデ属) 落葉広葉、高木

分布 福島県以西の本州、四国及び九州に分布

山地から平地にかけて広く自生する最も普通のカエデ

- 特徴
- イロハモミジは俗称(イロハカエデが本来の名)。葉が7つに大きく裂け、順に数えるとイロハニホヘトの7文字に合致することからイロハモミジと呼ばれる。
 - 紅葉の美しさから公園や庭園に植栽されている。
 - 幹は曲がりが多いものの、建材や器具材として使うこともある。

04 カツラ（桂）

学名 *Cercidiphyllum japonicum*

英名 Katsura tree

科名 カツラ科(カツラ属) 落葉広葉、高木

分布 北海道から九州まで日本全国の山地に分布

- 特徴
- 左右対称の端整な樹形、新緑と黄葉の美しさから万葉集・古事記にも名が登場
 - カツラの仲間は、白亜紀や古第三紀から生き延びる原始的な樹木の一つ
 - 葉は新緑の頃は微かに香るが、秋の香りはかなり強く、醤油の木、コウノキ(香の木)、抹香の木などの別名があり、乾燥させた葉を粉にし、抹香が作られる。
 - まっすぐに育ち、枝が細いため、丈が長くて節の少ない良質な材で、柔らかく加工しやすいため、造船や仏像、建材、家具材、漆器木地、寄木などに使用

05 カラマツ（唐松）

学名 *Larix kaempferi*

英名 Japanese larch

科名 マツ科(カラマツ属) 落葉針葉、高木

分布 蔵王山以南の本州中部に分布。天然の分布は長野県など標高の高い山地に自生
多くのカラマツ林は、江戸末期以降に植栽や植林

特徴

- 日本特産のマツとしては唯一の落葉性
- 成長がきわめて早いため、主に造林用として植栽される。新緑、黄葉あるいは落葉した樹姿が美しいため、自生地付近では観賞利用されることもある。
- 材は節やヤニが多い、狂いやすいため優れているとはいえないが、太くて真っすぐなわりに廉価であり、パルプ(集成材)、ガーデニング用の枕木、合板、壁板、フローリング、包装などに広く使用される。

06 キハダ（黄檗、黄膚など）

学名 *Phellodendron amurense*

英名 Amur Corktree

科名 ミカン科(キハダ属) 落葉広葉、高木

分布 北海道から九州までの広い範囲に分布
日本のほか中国、ロシアの国境(ウスリー、アムール)、朝鮮半島に分布

特徴

- 幹の下にある皮(内皮)が黄色いことからキハダと命名。
- 樹皮が漢方薬の材料、江戸時代は重要な薬用樹として保護。
- 黄色の内皮は染料として古来より利用、和紙を染めた黄檗紙は防虫効果があり戸籍、写本、写経に使われる。
- ケヤキに似た色味や光沢があり、建材、家具材、工芸品等に利用。

07 サワグルミ（沢胡桃）【別名:カワグルミ、フジグルミ】

学名 *Pterocarya rhoifolia*

英名 Japanese wingnut

科名 クルミ科(サワグルミ属) 落葉広葉、高木

分布 北海道南部から九州の各地に分布、特に東北に多い。
日本以外では中国の山東省に自生

特徴

- 実は食用にならない。
- 老木の樹皮は暗灰色で自然に剥がれ落ちる。その美しさから「寿光皮」と称され、工芸品や細工物に使われる。
- 材は白くて柔軟かつ強度があるため、マッチの軸木やキリの代用として下駄に使われる。

08 ヒガンザクラ(エドヒガンザクラ:江戸彼岸) ★花鑑賞

学名 *Prunus pendula* f. *ascendens*

英名 Edohigan cherry tree

科名 バラ科(サクラ属) 落葉広葉、高木

分布 本州、四国及び九州の山地に自生、関東地方に多く、春の彼岸の頃に咲くことからエドヒガンまたは(別名)アズマヒガンと命名。中国や朝鮮半島にも分布

特徴

- サクラの中では最も寿命が長く、樹齢千年を超えると伝わる古木、名木や樹姿によって天然記念物に指定。(馬場桜、石戸蒲桜、山高神代桜、根尾淡墨桜など)
- ソメイヨシノに比べ花弁の幅が狭く、花の基部の萼筒が膨らんでいる。
- 葉、葉柄、花柄には毛が多い。秋に多少黄葉するが落葉が早く、観賞期間短い。
- 樹皮は年を経るにつれて柿の木のように剥離。材は薪に使用

09 ヒバ（檜葉、比婆）【別名:ヒノキアスナロ】

学名 *Thujiopsis dolabrata* Sieb. et Tucc. var. *hondai* Makino

英名 *Aomori cypress*

科名 ヒノキ科(属) 常緑針葉、高木

分布 関東以北の本州、北海道
青森県と石川県のヒバ林が特に有名

- 特徴
- 本州南部の高い山や四国、九州に分布する「アスナロ」が、寒い北の地方で育つように変種したもの。
 - 樹脂に抗菌効果のある精油を含み、特有の匂いを放つ。
 - 肌目は緻密、木目はまっすぐ。耐朽性は国産材の中で最も高く、特に水湿に強い。土台をはじめ、構造材、造作材、根太、柱、風呂などに使われる。

10 ホオノキ（朴の木、厚朴）

学名 *Magnolia obovata*

英名 *Japanese white bark magnolia*

科名 モクレン科(ホオノキ属) 落葉広葉、高木

分布 北海道から九州に分布

古名はホオガシワで日本特産とされることもあるが中国にも分布

- 特徴
- 花、葉、実のすべてが大型。果実は食用にはならない。
 - 葉は大きくホオバと呼ばれ、若葉は食べ物を包むのに使われた。香りが良く、殺菌作用もある。
 - 成長が早く材はやや柔らかめだが、質が均一で加工しやすく軽量で、建具や引出、まな板、額縁、版木、彫刻、下駄などに幅広く使われる。

11 ミズキ（水木）【地域名:ダンゴギ】 ■コケシの材料

学名 *Cornus controversa*

英名 *Giant dogwood*

科名 ミズキ科(ミズキ属) 落葉広葉、高木

分布 北海道から九州の各地に分布

日本以外ではアジア大陸東部やヒマラヤ地方に見られる。

- 特徴
- 根から水を吸い上げる力が強く、春先に枝を切ると水が滴り落ちることからミズキ（水木）と呼ばれる。
 - 枝先に、白・赤の丸いダンゴを指して、正月に縁起物として飾る。
 - 材が白くコケシの材料
 - 成長は早い材は緻密で加工しやすい。年輪の目立たない青っぽい白一色になる。

12 ヤナギ（柳、柳、楊）

学名 *Salix* L.

英名 *Willow*

科名 ヤナギ科(ヤナギ属) 落葉広葉、高木

分布 世界に約 350 種あり、主に北半球に分布

日本には 30 種を超えるヤナギ属の種がある。これらは全て雌雄異株である。

- 特徴
- 日本でヤナギと言えば一般にシダレヤナギをいう。枝が垂れ下がる種類は「柳」枝が立ち上がる種類(ネコヤナギなど)は「楊」の字を当てる。
 - 水分の多い土壌を好み、川岸や湿地などに生育する。
 - 挿し木で容易に増えるため、川の侵食を防ぐため川岸に植林されたことが多い。
 - 歯磨き用の歯木として用いられた。

13 ヤマザクラ（山桜）【別名:シロヤマザクラ】★花鑑賞

学名 *Prunus jamasakura*

英名 Wild cherry tree

科名 バラ科(サクラ属) 落葉広葉、高木

分布 宮城県及び新潟県より西の本州、四国、九州に分布。日本に自生するサクラの代表

- 特徴
- 「山に咲く桜」であるためヤマザクラと命名。
 - 開花は3~4月、ソメイヨシノとは異なり、開花とともに若葉を開くのが特徴
 - 花の後、1センチ前後のサクランボが黒紫色に熟す、苦みがあり食べれない。ムクドリやヒヨドリなどはこれを採食する。
 - 材は程良い硬さと加工しやすさ、色合いの美しい仕上がりになるなど、家具、細工物、建築などに使用。耐久性と細かな加工に向くなど版木や型にも利用。

14 ヤマモミジ（山紅葉）

学名 *Acer palmatum var. matsumurae*

英名 Yama-momiji (Japanese Maple)

科名 ムクロジ科(カエデ属) 落葉広葉、高木

分布 北海道と本州の北中部(青森県から島根県)に分布、日本海側の山地に多い。

太平洋側に分布するイロハモミジ、オオモミジと共に日本のカエデを代表する樹種

- 特徴
- 新緑や紅葉の美しさを観賞するため庭木や盆栽として使われる。
 - 雌雄同株で、葉が展開する直前の5月頃に雄花と両性花を咲かせる。両性花の子房と呼ばれる部分には短い翼があり、細毛で覆われる。
 - 樹皮は緑がかった褐色でツルツルしている、樹齢を重ねると浅く縦に裂ける。
 - 材は建築や器具に使われるが、材木としての流通は稀。

15 イチョウ（銀杏）【別名:銀杏】●果樹

学名 *Ginkgo biloba*

英名 Ginkgo

科名 イチョウ科(イチョウ属) 落葉広葉(裸子植物)、高木

分布 約2億年前の中生代ジュラ紀に栄え、現在まで種を絶やさずに続く歴史の長い木

日本のイチョウは中国南東部に生き残っていたものが朝鮮半島経緯で渡来したとされる。

- 特徴
- 名は、中国名のイーチャオ(鴨脚=葉の形がカモの足に似ることから)が転訛
 - ギンナンは実でなく種子。多肉質の外種皮が悪臭、硬い殻の中の胚乳が食用。
 - 葉が燃えにくく、幹や枝も耐火性があり、「火伏の木」として街路樹等に多用。
 - 材はスギよりも硬く、クリーム色の綺麗な仕上がりになり、まな板や碁盤、将棋盤に使われるが、材としての耐久性はやや乏しい、また、流通はほぼない。

16 カキノキ（柿）【別名:カキ】●果樹

学名 *Diospyros kaki*

英名 Kaki Persimmon

科名 カキノキ科(カキノキ属) 落葉広葉、中高木

分布 中国や日本を主とする東洋特有の果樹。日本では本州西部から九州の山地を原産。東日本は渋柿、関東以西は日本独自の甘柿が多い。

- 特徴
- カロチンやビタミンが豊富な実は食用となる。若葉はビタミンCを多く含み、殺菌作用もあり「柿の葉茶」や「柿の葉寿司」に使われる。
 - 渋柿を絞って発酵、熟成させたものは「柿渋」と呼ばれ、昔から防腐、防水用の塗料として使われてきた。
 - 語源は、「赤木」(赤い実がなる木の意)などが転訛した説などがある。
 - 全般にカキノキの木は折れやすいが、材は硬く、「硬き木」が語源という説もある。

17 クリ（栗） ●果樹

学名 *Castanea crenata*

英名 Chestnut tree

科名 ブナ科(クリ属) 落葉広葉、高木

分布 暖帯から温帯域に分布

- 特徴
- 野生のクリはシバグリ、ヤマグリなどで、現在、果樹として食べているクリは、ほとんどが外国産や栽培種
 - 特徴はシバグリ、ヤマグリを参照

18 ヤマグリ（山栗）【別名:シバグリ】 ●果樹

学名 *Castanea crenata*

英名 Chestnut tree

科名 ブナ科(クリ属) 落葉広葉、高木

分布 北海道南部から九州まで広い範囲の山野に自生

- 特徴
- 現在は果樹であるが、農耕が始まる以前の古代から食糧・常食になっていた。
 - クリの食べ頃は、イガが枝から落下したとき(落ちるのは実が熟した証拠)
 - リスやムササビなどの野生動物も好んで食べる。
 - タンニンを含むクリの材は防虫処理なしでも耐久性があり、建築物の基礎、枕木や船の材料、家具や浴室の板、シイタケ栽培の原木として利用
 - 樹皮はコナラのような外観で、染料や皮なめしに使用

19 キリ（桐） ◆家具材

学名 *Paulownia tomentosa*

英名 Paulownia Empress tree

科名 キリ科(属) 落葉広葉、高木

分布 中国中部が原産地。日本へ渡来時期は不詳、北海道南部から九州の各地に分布。材木の有用樹として古くから植栽され、種子が飛散して野生化したものがある。

- 特徴
- 国産材の中で最も軽量で柔軟で扱いやすく、真っすぐで狂いがなく、乳白色の木目が美しい。材は耐湿性が高く、建具、長持、小箱、下駄、琴や琵琶などの楽器、羽子板、人形、仮面などにも使われる。
 - 木の樹皮は灰褐色で、樹齢を重ねると表面にポツポツと模様が入る。
 - 淡い紫色の花が円錐状に集まって、高いところに咲く。強風で散りやすい。

20 トチノキ（橡、朽、朽木） ■家具材

学名 *Aesculus turbinata*

英名 Horse chestnut

科名 ムクロジ科←トチノキ科(トチノキ属) 落葉広葉、高木

分布 北海道西南部から九州中北部までの山地に生育
日本の特産樹

- 特徴
- 樹形が自然に整いやすく、新緑や黄葉が美しいので街路樹や公園に植栽
 - クリに似た実は蛋白質が豊富で、古くから貴重な栄養源として食用
 - 実には下痢や胃腸炎、脱水症状になる毒性物質が含まれ、苦味があり十分な灰汁抜きが必要。また、石鹼代わりや塗り薬などとして用いられてきた。
 - 材は広葉樹としては柔らかく、加工しやすい。美しい木目(朽空)が入る。耐久性が不足し建材には不向きで、家具や臼、搗粉木、盆などの細工物に使用。

21 ケヤキ（欒）【別名:ツキノキ(槻木)】 ■建築材

学名 *Zelkova serrata*

英名 *Zelkova*

科名 ニレ科(ケヤキ属) 落葉広葉、高木

分布 北海道西南部、本州、四国及び九州の山地や丘陵に自生
日本を代表する巨木の一つだが、朝鮮半島や中国にも自生

特徴

- 古代は、強い木を意味する槻(ツキ)あるいは槻木(ツキノキ)と呼ばれていた。
- ケヤキは「けやけき木」で、他の木より一際目立って樹形が端整であることや、木目が美しいことを意味する。
- 耐久性や耐湿性が高いため、箆笥、和太鼓などの道具や楽器に使われるほか、神社仏閣の柱にも使われる。

22 スギ（杉） ■建築材

学名 *Cryptomeria japonica*

英名 *Japanese cedar*

科名 ヒノキ科(旧スギ科/スギ属) 常緑針葉、高木

分布 青森県及び秋田県の県境から屋久島まで、日本全国に広く分布する常緑樹
日本の樹木の中では最も広い面積に植林(戦後大量に植林され放置された)

特徴

- 成長の早さや材の軽さ、加工のしやすさ、まっすぐに通る木目の美しさにより建築材として有用視される。スギは日本で最も高くなる木でもある。
- 天に向かって真っすぐに伸びる様が、神の依り代と考えられ神社仏閣に多い。
- 樹皮は赤褐色または褐色で縦に裂けて薄く剥がれ、造園用資材や屋根を葺くのに使われる。材は縄文時代から丸木舟、道具などに、現代でも土木、建築、家具、器具、船舶、箸、酒・味噌・醤油などの樽に使われる。

23 アオキ（青木）

学名 *Aucuba japonica var. japonica*

英名 *Japanese Aucuba*

科名 ミズキ科(アオキ属) 常緑広葉、低木

分布 北海道南部から沖縄まで日本各地に広く分布する常緑低木
海岸近くの樹林に多いが、身近な雑木林の林内にも自生

特徴

- 花の少ない初冬に実をつける。実は始めは緑色だが、鮮やかな赤色に色づく
- 果実は直径2センチ程度と大きくて目立ち、ヒヨドリなどが好んで食べる。
- 葉を乾燥させるとたちまち黒くなるが、これには抗菌作用があり、葉を炙って人工的に黒変させたものを火傷、しもやけ、凍傷などに症状を緩和する効果や、煎じた葉は下剤になると言われている。

24 アブラチャン（油漑青）

学名 *Lindera praecox*

英名 *Aburatyan tree*

科名 クスノキ科(シロモジ属) 落葉広葉、低木

分布 本州、四国及び九州の各地に分布

特徴

- 木全体に油分が多く、触るとどこことなく油っぽいのが大きな特徴
- かつては果実や樹皮を燃料、灯油、整髪油に使用。材も油分が多くよく燃える。
- 葉の色が明るく、赤みのある葉柄や秋の黄葉が美しいなど庭木に利用。枝を折ったり、葉を揉んだりすると、クスノキ科特有の香りがある。
- 幹は株立ちになることが多いため、別名を「ムラダチ(群立ち)」ともいう。

25 ウコギ（五加木） ●新芽が食用

学名 *Eleutherococcus spinosus*

英名 *Araliaceae*

科名 ウコギ科(ウコギ属) 落葉広葉、低木

分布 ヤマウコギは岩手県以南の本州及び四国西部に分布

食用に栽培されるヒメウコギは中国が原産地、薬用として植えられ、野生化

- 特徴
- 芽や若葉には特有の苦味と香りがあり、古くから春の山菜として食用される。アクが強く、天婦羅以外の料理では灰汁抜きが必要。
 - 若芽や若葉を刻み、塩味に炊いた御飯に混ぜ込んだ五加木飯と呼ばれ、若葉は、天婦羅、酢味噌和え、お浸しに、焙じた葉は茶の代用として親しまれる。
 - 漢方の「五加皮(ごかひ)」はヒメウコギの根の皮、ヤマウコギの根にも同様の成分を含み、鎮痛や強壯の効能があるとされる。

26 オオバクロモジ【別名:クロモジ(黒文字)】

学名 *Lindera umbellata*

英名 *Spicebush*

科名 クスノキ科(クロモジ属) 落葉広葉、低木

分布 関東地方以西の本州、四国(瀬戸内海側)及び九州の雑木林に見られる。

オオバクロモジは北海道南西部及び東北地方に分布する葉の大きい品種を言う。

- 特徴
- 樹皮や葉には芳香成分が含まれ、柑橘系に似た特有の香りがある。樹皮を残した材で作られた爪楊枝は高級品として茶席などで使われる。
 - 材が白くて美しく、緻密かつ均質で加工しやすいなど細工物などに使われる。
 - 実は黒く熟し、果肉にも脂分が多い。果実や枝葉から採取される「クロモジ油」には抗菌や鎮静に効果があり、化粧品、香料、入浴剤に使われる。

27 ガマズミ（莢蒾） ★花鑑賞

学名 *Viburnum dilatatum*

英名 *Japanese bush cranberry*

科名 レンブクソウ科(ガマズミ属) 落葉広葉、低木

分布 北海道南西部、本州、四国及び九州に分布

漢字表記の「莢蒾(きょうめい)」は漢語で、中国や朝鮮半島にも自生

- 特徴
- 全国に広く分布する植物で、イヨゾメ、カメガラ、シモフリ、シモフリグミ、スズミ、ソゾミ、ヨシヅミ、ヨツズミ、ヨンゾメなど地方名が多い。
 - 果実は直径6ミリほどの楕円形で、酸味が強いが、晩秋に甘味が増し食べることができる。大根などの漬物を赤く染める着色料や果実酒としても使われる。

28 ツバキ（椿）【別名:ヤブツバキ】 ★花鑑賞

学名 *Camellia japonica*

英名 *Camellia japonica*(学名が英語名になっている珍しい例)

科名 ツバキ科(ツバキ属) 常緑広葉、低木

分布 日本原産。北海道南西部、本州、四国、九州、南西諸島の海沿いや山地に自生。

日本国外では朝鮮半島南部と中国、台湾が知られる。

- 特徴
- 照葉樹林の代表的な樹木で、花色は赤色と白色があり、それぞれ紅椿、白椿と呼ばれ、園芸種・庭木として植えられ、鑑賞される。
 - 種子からとれる椿油は上質で、高級食用油、機械油、整髪用や養毛剤に使用
 - 木質は固く緻密、均質で、摩耗に強くて摩り減らない等の特徴から、木具材、工芸品、細工物などに使われる。材の灰は、紫根染の媒染剤になる。

29 ヤマグワ（山桑）【別名:クワ】 ◎かつて蚕の食用

学名 *Morus australis*

英名 Chinese mulberry

科名 クワ科(クワ属) 落葉広葉、低木

分布 北海道から九州まで日本全国の丘陵や山地に広く自生
日本以外でも中国や朝鮮半島に分布

特徴

- 狭義には、北陸から東北で広く栽培されたクワがヤマグワで耐寒性がある。
- かつては中国産のマグワと共に養蚕のための重要な飼料として栽培された。
- 未熟な果実は硬くて酸っぱいが、熟すと柔らかく甘みがあり食べられた。
- 材は硬質で耐久性が高い。色味が良く、「空(もく)」と呼ばれる模様が入りやすく、床柱、框(かまち)、茶道具、家具、仏壇などの造作の化粧に使われた。

30 ユキツバキ（雪椿）★花鑑賞

学名 *Camellia japonica* var. *decumbens*

英名 Yukitsubaki tree

科名 ツバキ科(ツバキ属) 常緑広葉、低木

分布 奥羽地方(東北)から北陸及び山陰地方の日本海沿いに見られるツバキの一種

特徴

- 名の由来は雪に耐えて育つで、枝がしなやかで豪雪に押しつぶされても、春になると枝を持ち上げて開花する力強さを持ち、新潟県では「県木」に指定。
- 花は深紅色で水平に開き、黄色い雄しべが目立つ。実がなるのは稀でツバキ油を採るのは難しい。木質や性質はヤブツバキと同様。
- 樹高は積雪高と密接な関連があり、雪の上に顔を出すことはないため、ユキツバキの樹高を見れば、その土地の最大積雪量の見当がつくと言われる。

31 ナリヒラダケ（業平竹）【別名:ダイミョウチク、フエダケ】

学名 *Semiarundinaria fastuosa*

英名 -

科名 イネ科(ナリヒラダケ属) 常緑多年生竹の一種

分布 本州中南部の川沿いに自生

特徴

- マダケとは異なる独特の枯れた色形を持つ、稈が細くて枝が短いために手入れがしやすいことから、観賞用に庭園や茶庭に植栽されるケースが多い。
- その姿形が、平安時代の歌人在原業平のように容姿端麗で美しいということから、植物学者牧野富太郎氏が命名

32 モウソウチク（孟宗竹） ●タケノコ食用

学名 *Phyllostachys heterocycla* f. *pubescens*

英名 Moso bamboo

科名 イネ科(マダケ属)

分布 北海道南部以南に分布する代表的なタケ
原産地は中国江南地方

特徴

- タケノコが食用に向くこと、棹が加工しやすいことなどから各地に広まった。
- タケノコは日に当たるとエグ味が出るため、地面から顔を出す寸前のものを早朝に収穫する必要がある。
- 肉厚の俣はしなやかで加工しやすく、竹垣や民芸品に使われる。成長が早いため材は粗く、マダケより耐久性が落ちるため籠などの編物細工には不向き。
- 繁殖力が高く、既存の森林へ侵入して他の樹木を枯死させるなど問題も多い。

昔はみんなのしかった 文化人類学手法によるフィールド・ワークから



小貫 (上村) 集落 案内図

中央の農協跡には、休憩できるようにテントが設営されています。

黄色や青の小旗のついたポール沿いの小径に、集落の建物跡や主な樹木等に屋号や植物名、場所の説明などの看板が立ててあります。

木陰の小径を歩きながら、探してみてください。

また、「小坂」跡は眺望が開けています。小貫集落の眺望を楽しんで下さい。